

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12160

研究課題名（和文）在日外国人の子どもと保護者用「危険回避教育ツール」の開発

研究課題名（英文）The development of 'Accident Prevention Educational Tool' for foreign children and their guardians residing in Japan

研究代表者

柴 邦代 (SHIBA, KUNIYO)

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：40413306

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の医療機関に入院する在日外国人の子どもとその保護者を対象とした「危険回避教育ツール」の開発を目的とした。

日本語の「危険回避教育ツール」をポルトガル語に翻訳したあと、子どもの事故に関する在日ブラジル人保護者の危険回避行動についての認識と行動に関する調査等から明らかになった在日ブラジル人親子の特徴を考慮し、転落防止ツールの内容の一部に重みづけを行って、ポルトガル語版（日本語併記）「事故危険回避教育ツール」を完成させた。完成したツールは、研究者のホームページ上（<https://www.kodomokazoku-kango.net/>）で、英語版・中国語版とともに公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在日外国人居住者数は年々増加しており、医療現場における対応の必要性も高まっているが、国籍や対応言語の多様性から、この分野の研究は進んでいない。特に、医療現場における患者の安全に関する研究は、日本人対象では行われているが、外国人対象のものは皆無であり、外国人の子どもへの事故防止に関する研究は存在しない。対象者が少ないことやコミュニケーション上の制約等から、取り組みにくい研究分野ではあるが、外国人が日本で安心して医療を受けられることを保証するために、本研究のような研究は必要であると考え。本研究では、一言語のツール開発に留まったが、他言語にも対応するツール開発につながる第一歩になったと考える。

研究成果の概要（英文）：In the present study, we aimed to develop a Japanese version of a risk prevention educational tool for foreign children who are inpatients of Japanese medical institutions and their guardians residing in Japan.

The Portuguese tool translated from the Japanese tool was improved to place importance on some of the contents of the fall prevention tool based on the characteristics of Brazilian parents and children residing in Japan, which was elucidated from the results of a survey on awareness and behavior of risk avoidance behaviors of Brazilian guardians residing in Japan with regard to accidents to children, thereby completing the Portuguese version (Japanese bilingual) of the accident prevention educational tool.

The completed tool has been published on the researcher's home page (<https://www.kodomokazoku-kango.net/>) along with the English version and Chinese version of the tool.

研究分野：小児看護学

キーワード：在日ブラジル人 入院児の事故 危険回避教育ツール 母親 事故防止 認識 行動 情報アクセス

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

入院中の子どもの事故例は多々報告されており、特に、病棟内での転倒やベッドからの転落は約 80%が家族の目の前で起きていることから、事故防止には子どもと保護者への系統的な予防行動への働きかけが必須であると考えられ、入院中の子どもと保護者を対象とした「危険回避教育ツール」（以下、ツール）が開発された（挑戦的萌芽研究；課題番号 21659521）。開発されたツールは、保護者の危険回避行動に関する認識・行動の側面から有効性が確認（山口他, 2012）され、その後も、有効性検証が継続されていた。先行研究では、ツールの性別・年齢・患児の状況との適合性や耐久性に関する改善の必要性が示唆され、ツールの種類・内容・デザインなどを見直し、より使いやすく、わかりやすいツールへと改訂する必要があるとあった。

一方で、申請者は、臨床からの要望として、在日外国人の子どもと保護者に適応可能なツールを求められていた。日本には、多くの外国人が在留しており、2020 年のオリンピック開催に向けて、訪日する外国人はさらに増加することが予測されていた。研究開始当初、外国人対象の医療用パンフレットなどは、成人対象のものが一般的であり、子ども用のものは普及していなかった。そこで、外国人の子どもと保護者を対象とした外国人向けツールを開発する必要があると考えた。

外国人向けツールを作成するにあたり、日本人と外国人の子ども入院では、事故の種類や保護者の危険回避に関する認識や行動が同じなのかという点に疑問を感じた。しかし、外国人の子ども入院中の事故や、保護者の危険回避に関する認識や行動などに関する先行研究は見当たらなかった。そこで、外国人の子ども事故要因や予防行動、ならびに、保護者の危険回避に関する認識や行動などを明確化する必要があるとあった。外国人向けツールの作成では、単に既存のツールの翻訳版を作成するにとどまらず、明らかになった外国人の子どもと保護者の特徴を、ツールの内容や表現方法に反映する必要があると考えた。

本研究では研究代表者の所属大学がある愛知県で在住者数が多く、所属大学が「あいち医療通訳システム」の委託事業として、ポルトガル語・スペイン語医療通訳者の養成を行っていることなどから、在日外国人の中で、ブラジル人の子どもと保護者を対象としたポルトガル語版のツールを開発することにした。

2. 研究の目的

- (1) 「危険回避教育ツール」のデザイン・内容について見直し、改善点を明らかにする。
- (2) 在日ブラジル人の子どもの医療機関での事故実態と実施されている事故防止対策を明らかにする。
- (3) 子どもの事故に関する在日ブラジル人保護者の危険回避行動についての認識と行動について調査し、日本人保護者と比較することにより、在日ブラジル人保護者の特徴を明らかにする。
- (4) 「危険回避教育ツール」を基盤として、在日ブラジル人の子どもと保護者向け「危険回避教育ツール」を作成し、ツールの有効性を検証する。

3. 研究の方法

- (1) 「危険回避教育ツール」の見直し、および、改善点の明確化

「危険回避教育ツール」について、ツールの評価を目的とした研究者らによる先行研究で明らかになっている課題を整理した。また、ツールを使用する対象者を拡大して評価を目的とした研究を重ね、患児・家族およびツールを使用した看護師を対象としたアンケート調査をとおして、改善点の明確化をめざした。

- (2) 在日ブラジル人の子どもの医療機関での事故実態・事故防止対策を明確化

在日ブラジル人（以下、ブラジル人）の子ども医療機関での事故実態および事故防止対策を明らかにするため、ブラジル人の子どもが入院することのある医療機関の看護師を対象とした聞き取り調査を行った。

- (3) 子どもの事故に関するブラジル人保護者の危険回避行動についての認識と行動の明確化

愛知県内において、6 歳以下のブラジル人居住者数が多い市のうち、保育担当課から研究協力を承諾の得られた 8 市の公立保育園に通園するブラジル人園児の保護者と日本人の保護者を対象としたアンケート調査を実施した。

対象者には、通園する保育園を介してアンケート用紙を配付してもらい、保護者本人から返信用封筒で研究者に返信してもらった。なお、ブラジル人の保護者には、ポルトガル語版のアンケート用紙を配付した。

調査内容は、属性項目として、ブラジル人・日本人共通で①母親の年代、②子どもの年齢、③子どもと接する機会の多い小児看護師や保育士をしているかを尋ね、ブラジル人には④国籍、⑤

滞在期間、⑥日本語コミュニケーション能力についても尋ねた。子どもの事故防止に関する認識・行動に影響する項目では、①子どもの事故防止に関する情報入手方法に関する項目、②子どもの外傷への対処経験に関する項目（けがによる受診経験・救急搬送経験など）、③事故防止の情報源の認知度に関する項目について質問した。子どもの事故防止に関する項目は、田中(2007)が作成した新事故防止マニュアル等を参考に自作した認識4項目と行動11項目で、回答方法は「とてもそう」～「まったくそうでない」の6段階判定とした。

なお、アンケート調査は、研究代表者の所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(30 愛県大学情第6-44号)。

(4) 在日ブラジル人の子どもと保護者向け「危険回避教育ツール」の作成および有効性検証

在日ブラジル人の子どもと保護者向け「危険回避教育ツール」の作成は、日本語版のツールをポルトガル語に翻訳し、翻訳版のツール(以下、翻訳版)を作成することから開始した。翻訳版を幼児期の子どもを持つブラジル人の母親5名に見てもらい、デザインと内容の表現について聞き取り調査を行い、改善すべき点を小児看護の専門家会議で検討した。

その後、専門家会議での検討を経た翻訳版をブラジル人の子どもが入院する1病院の3病棟(急性期病棟2か所、慢性期病棟1か所)で使用してもらい、翻訳版を使用した看護師5名にインタビューを行った。翻訳版を配付された子どもと保護者の反応、看護師自身の翻訳版に関する感想と評価を語ってもらい、逐語録を作成して意味内容をもとにカテゴリー化し、翻訳版の改良点を検討した。

4. 研究成果

(1) 「危険回避教育ツール」の見直し、および、改善点の明確化

ツールの評価を目的とした先行研究(柴, 2015; 田中他, 2015; 木村他, 2016; 西川他, 2017)およびその後の研究(鎌田他, 2019; 浅田他, 2019)から、ツールの内容やデザインについては、どの調査においても概ね肯定的評価が得られていることが確認された。一方で、絵本を親子で組み立ててもらったタイプであったことから、作成が難しかったという指摘もあり、折り紙文化のないブラジル人親子では、日本人以上にツールを組み立てることは困難であることが予測され、病棟保育士と一緒に作成することや完成品で渡すこと等について検討する必要性が示唆された。また、紙製のツールの強度について「子どもが破ってしまったので、タブレットで視聴できるアプリケーションタイプのツールの方が良い」といった意見もあった。本ツールの開発者は、紙製にすることで、親子と一緒に絵本に組み立てたり、色塗りをしたりすることで、楽しみながら事故防止の内容を知ってもらうという意図をもって紙のツールにしていた。しかし、ブラジル人の親子にとって利用しやすい形でのツールにするために、今後、ツールの素材や情報提供の方法についても検討する必要性が確認された。これらの結果を踏まえ、翻訳版の作成を進めた。

(2) 在日ブラジル人の子どもの医療機関での事故実態・事故防止対策を明確化

在日ブラジル人の子どもの医療機関での事故実態および事故防止対策を明らかにするため文献検討を実施したが、在日外国人の入院中の事故に関する先行研究は見当たらなかった。また、入院中の子どもの事故についての事故防止対策に関する先行研究は、転倒・転落事故を予防するための対策が多かったが、在日外国人の子どもに限定したものは見当たらなかった。

そこで、上記の研究方法(4)で翻訳版評価のために行ったインタビューの対象者である看護師5名に、日本人と外国人では事故実態や実施している事故防止対策に違いがあるかを尋ねた。その結果、「ブラジル人の入院児は言葉が通じないからプレイルームにもあまり行かない。ベッドから動かない」という語りがあり、日本人の入院児よりブラジル人の入院児は転倒リスクが低いと認識していることが明らかになった。また、保護者への事故防止に関する説明については、「守ってほしいことだけ単語で伝える。なぜそれが必要かまでは言っていない。言葉がわからないから言えない」という実態や、「日本人より指示を忠実に守ってくれる気がする。本当にわかったかどうかかわからないけど『だいじょうぶ』って。日本人みたいに質問や意見はしない。聞かないだけかもしれないけど」のように、看護師による説明や保護者とのやりとりには、言葉の制約に関連すると思われる特徴があることが明らかになった。このような状況に対し「言葉がわかれば、ちゃんと理由とか事故事例とかも説明してあげた方がいいんだろうけど・・・」という現状を問題だと感じつつも、対処できないでいる状況が明らかになった。

(3) 子どもの事故に関するブラジル人保護者の危険回避行動についての認識と行動の明確化

子どもの事故防止に関する認識と行動について、ブラジル人の母親89名と日本人の母親233名を対象としたアンケート調査を行った結果、子どもの事故防止に関する認識についての得点平均は、ブラジル人母4.58、日本人母4.72で日本人母のほうがブラジル人母より高いことが確認できた。また、子どもの事故防止に関する行動についての得点平均では、ブラジル人母5.24、

日本人母 4.32 で、ブラジル人母のほうが日本人母より高い結果であった。本研究の結果から、ブラジル人母は、子どもの事故防止に関する認識では日本人母より低いものの、事故防止行動は日本人母よりしっかり行っているという特徴が明らかになった。さらに、ブラジル人母は子どもの事故防止に関する情報を友人・知人・家族のほか、広報誌やテレビ・ラジオなどから得ているが、日本語による情報はアクセスされにくいという特徴も明らかになった。日本人母に比べてブラジル人母は、医療者や保育園からの情報入手も少なかったことから、医療者が保育園・幼稚園・学校と協力して安全教育に役立つツールを作成すること、ブラジル人母がアクセスしやすい事故防止情報の提供方法を検討することの必要性が示唆された。

(4) 在日ブラジル人の子どもと保護者向け「危険回避教育ツール」の作成および有効性検証

①ポルトガル語翻訳

「危険回避教育ツール」のポルトガル語への翻訳は、ブラジル人親子が使用することを考慮し、翻訳業者には依頼せず、日本に長期に在住し、日本語とポルトガル語の双方に精通していて、子育て経験を持つ母親でもあるブラジル人に依頼した。翻訳者自身が、イラストの場面を正しく理解し、文章に示されたメッセージを正しく理解しているかを丁寧に確認した。日本語版には、イラストに付随して多くの擬音が文字化して使われているが、外国語には置き換えられる擬音が存在しなかったことから、日本語版で使用された擬音を、そのままアルファベットで記載することにした。点滴事故のツールに記載された持続点滴をする子どもの状況は、翻訳者に子どもの点滴経験がなかったためにイメージされにくかったため、何度もやり取りを重ねて、内容を理解してもらった。このように、医療者ではない翻訳者の意見を取り入れながら翻訳作業を進めたことで、医療者ではないブラジル人にもわかりやすいツールを作成することができたと考える。

②ブラジル人の母親への聞き取り調査

在日ブラジル人の母親 5 名に翻訳版を見てもらい、①の翻訳者に協力を得て、翻訳版のデザインと内容の表現について意見を聞いてもらった。5 名全員が、ポルトガル語のツールそのものに肯定的な反応を示した。内容に分かりにくいところはなく、デザインについても高評価であった。この結果から、翻訳版は臨床でブラジル人親子に使用することが可能であると判断した。

③看護師から見た評価

ブラジル人の子どもが入院する 1 病院の 3 病棟(急性期病棟 2 か所、慢性期病棟 1 か所)で、入院中のブラジル人親子 6 組に翻訳版を配付してもらい、対象の親子とかかわった看護師 5 名にインタビューを行った。翻訳版を配付された子どもと保護者の反応、看護師自身の翻訳版に関する感想と評価を語ってもらい、逐語録を作成して意味内容をもとにカテゴリー化し、翻訳版の改良点を検討した。

翻訳版を配付した子どもの年齢は 6 ヶ月～9 歳、保護者は母親 3 名と父親 3 名、保護者の日本語能力は片言程度 2 名と日常会話程度 4 名であった。インタビュー対象となった看護師 5 名は、女性 3 名と男性 2 名、年代は 20 歳代～40 歳代、経験年数は 2 年～19 年、インタビュー時間は 20～50 分(平均 42 分)であった。

ツールへの親子の反応 9 カテゴリー、ブラジル人保護者の事故防止行動 9 カテゴリー、看護師によるツール配付の評価 7 カテゴリーが抽出された。看護師の語ったツールへの親子の反応では、子どもたちのツールに対する関心は低かったが、保護者はポルトガル語によるツールの存在自体に感動し、肯定的反応を示していたという。ツール配付後、保護者にはツールに記載された事故防止行動を実行している様子が確認されたが、その一方で、転落防止ツールに関しては、保護者がベッドサイドにいる状況で子どものベッドの柵が挙上されておらず、ツールの効果は確認できなかった。この結果から、ベッド柵挙上について強調する必要性が示唆され、ツールのデザインを修正することにした。また、ポルトガル語の分からない看護師と日本語がわからないブラジル人親子がともにツールの内容を理解できるように、日本語とポルトガル語を併記したツールにした。そこで、転落ツールは、ベッド柵挙上に関する内容に重みづけをしたデザインに修正して完成した。日本語版併記の重みづけポルトガル語版「危険回避教育ツール」は、研究者のホームページ上で公開している。

今回、翻訳版を配付したブラジル人の入院児は、ベッドから離れることが少なかったこと、点滴をしている子どもがいなかったことから、転倒ツールと点滴ツールの改良点を確認することはできなかった。これらのツールの改善点を確認するための研究を、今後継続する必要がある。

<引用文献>

- 山口桂子, 服部淳子, 西原みゆき, 森園子, 竹腰由起子, 露峰久美子, 森田恵美子, 岡崎章 (2012). 入院中の小児に対する事故危険回避教育ツールの開発—保護者の行動意識の変化から—. 愛知県立大学紀要, 18.
- 田中哲郎 (2007). 新子どもの事故防止マニュアル改訂第 4 版, 診断と治療社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柴邦代, 田中理恵, 緒方せりか, 玉井さよこ, 宮田美香, 澤部啓子, 井上真理子, 汲田明美, 服部淳子, 岡崎章	4. 巻 23
2. 論文標題 入院児と保護者向けに開発された事故危険回避教育ツールの評価 - 保護者の事故予防行動に関する行動変容から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛知県立大学看護学部紀要	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 柴邦代・汲田明美・服部淳子・岡崎章
2. 発表標題 ポルトガル語版事故危険回避教育ツールに対する保護者の反応 - 在日ブラジル人の入院児と保護者にツールを使用した看護師の語りから
3. 学会等名 第23回一般社団法人日本看護研究学会東海地方会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴邦代・服部淳子・汲田明美・岡崎章
2. 発表標題 子どもの事故防止に関する在日ブラジル人母親と日本人母親との認識および行動の比較
3. 学会等名 日本小児看護学会第29 回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴邦代・服部淳子・汲田明美・岡崎章
2. 発表標題 在日外国人の入院児と保護者用「事故危険回避教育ツール」の開発
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴邦代、服部淳子、汲田明美、天草百合江、岡崎章
2. 発表標題 ポルトガル語版事故危険回避教育ツールの開発課程における課題
3. 学会等名 第6回日本小児診療多職種研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村友美、西川広紀、植木美貴子、柴邦代、汲田明美、天草百合江、服部淳子、岡崎章
2. 発表標題 「入院中の小児に対する事故危険回避教育ツール」導入の効果 - 保護者によるツールに関する評価と事故防止行動に関する意識の変化 -
3. 学会等名 日本小児看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kuniyo Shiba, Akemi Kumita, Hiroki Nishikawa, Tomomi Kimura, Mikiko Ueki, Junko Hattori, Akira Okazaki.
2. 発表標題 Evaluation of the Accident Prevention Educational Tool for Pediatric Inpatients and their Families based on Parental Data
3. 学会等名 The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroki Nishikawa, Kuniyo Shiba, Akemi Kumita, Tomomi Kimura, Mikiko Ueki, Junko Hattori, Akira Okazaki.
2. 発表標題 Evaluation of the Accident Prevention Educational Tool for Child Inpatients and their families~Survey of families' change in behavioral awareness of preventive actions~
3. 学会等名 The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	天草 百合江 (Amakusa Yurie) (10757545)	愛知県立大学・看護学部・助教 (23901)	
研究分担者	岡崎 章 (Okazaki Akira) (40244975)	拓殖大学・工学部・教授 (32638)	
研究分担者	服部 淳子 (Hattori Junko) (70233377)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	
研究分担者	汲田 明美 (Kumita Akemi) (80716738)	愛知県立大学・看護学部・講師 (23901)	